

琉球大学学術リポジトリ

社会科実践「垂水のまち～地域に学ぶ子どもたち～」 （第3学年）Ⅰの分析

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2023-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白尾, 裕志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019698

社会科実践「垂水のまち～地域に学ぶ子どもたち～」(第3学年) I の分析

白尾 裕志*

Analysis of social studies class “Tarumi Town-Children Learning in the Community-” (3rd grade) I

Hiroshi SHIRAO*

1. 社会科実践「垂水のまち」(小学3年生)と本稿の目的

この実践は、教員になって5年目に2校目の勤務校である垂水市立垂水小学校で初めて3年生を担当した時の実践記録である。1988年4月に垂水小学校へ赴任し、この年は第5学年で「垂水の漁業」¹⁾を実践した。翌年がこの「垂水のまち」の実践にあたる。

当時、教育方法的には若狭蔵之助の『問いかけ学ぶ子どもたち』²⁾や『子どもと学級』³⁾に影響を受け、子どもの生活からの学びや子どもが本気に

なる興味や関心から学習をつくっていくことを実践の課題としていた。教育内容的には、鈴木正気の『学校探検から自動車工業まで』⁴⁾の影響を受け、地域の生産活動や親の労働を通して支え合う相互関係を子どもの生活とも関わらせるような教育内容を構想しようとしていた。生活綴り方的な手法を取り入れ、子どもたちには「自由勉強」として取り組ませながら、第3学年の社会科の目標や内容に迫ろうとして実践を試みた。

一人ひとりの子どもの自由な表現とグループや学級での共有を重視した教育方法による社会科の

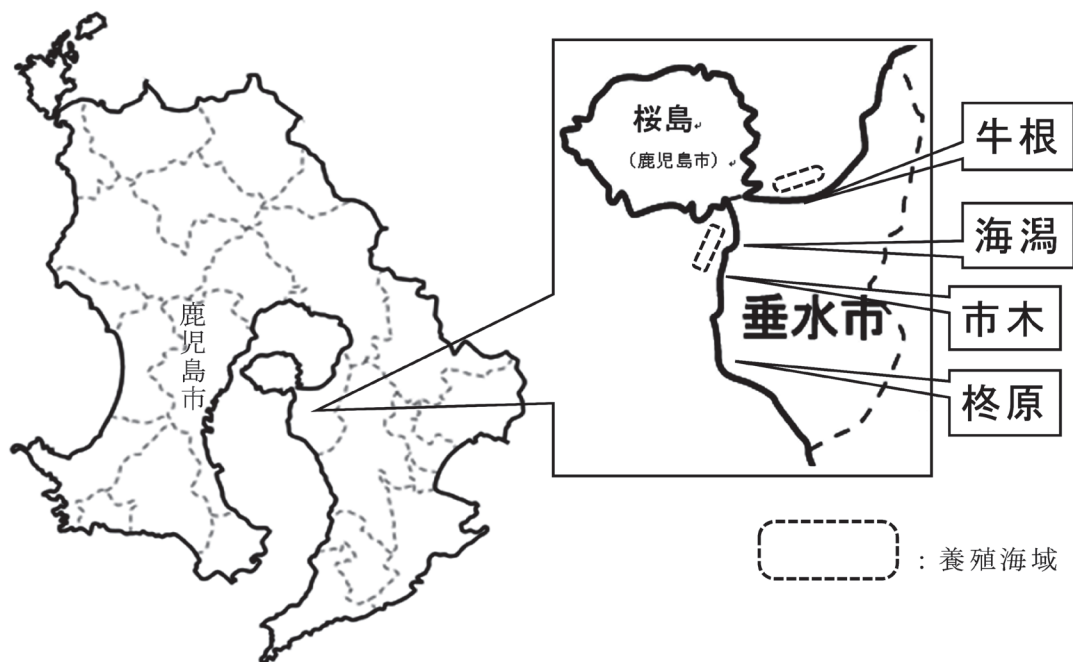


図1 鹿児島県本土の地図

* 琉球大学大学院教育学研究科教職実践講座 教授

教育実践としての成果と課題を明確にして、併せて約1年間にわたる実践を記録することが本稿の目的である。※全ての氏名は仮名である。

2. 実践の背景

初めて3年生を担任した。地域を舞台に1年間、社会科を学習するので早くやってみたかったが、それだけにまた、1年間どういう視点で学習に取り組むのかについては考え込まざるを得なかった。これまで、地域をとらえ、しかも子どもたちが楽しく意欲的に学習できるように地域の中から教材を組んだり、子どもたちの生活とのかかわりや、子ども自身の認識の連続を大事にし、さらにそれらを授業で結び付けるための学習の順次性や発問などを工夫してきた。

今回もそうした基本的な考え方に変化はないが、子どもが自分から動くようになることを目先の学習を「工夫」し続けることに求めないことにした。もっと根源的なところで「子どもが動く」ことを考えようとした。それには、地域に生きる目の前の子どもたちをどうとらえるのかということ、そこから当然出てくるであろう（社会科）教育の課題を自分なりに見極める必要があった。

放課後の子どもたちを待ち構えているものは、宿題、学習塾、そろばん、習字、ピアノ、英語教室、スポーツ少年団、ファミコン、ゲームセンターなど随分たくさんある。中にはこの中のいくつをも一人でこなす子もいる。一見「多様化」したようにも思える子どもたちの放課後は、パターン化され、多忙化されてきた。その時々の子どもの数や構成、場所、気持ちによって多彩に変化する遊びのもつ多様性とは全く異なった「多様性」を子どもたちの放課後は持つようになった。こうしたことはもう随分前に指摘されてきたが、一向に改善されず、益々進行している。この中で子どもたちは与えられた課題をこなすことを行動パターンとして習得していく。また、それぞれの場所には大人が準備した「環境」が整えられているために、試行錯誤の中で人間関係を作り上げなくても、「仲よく」適応させれば済んでしまう。しかしこうした子どもたちの放課後の「多様性」とその影響は、実はその親たちによって支えられている。親は「言われないと何もしない子ども」や「課題を与えら

れると喜ぶ子ども」、「いじめられてもそのことを誰にも言わない子ども」を好き好んで求めているわけではないのに、子どもたちの放課後の「多様性」は、こうした子どもたちを増やす結果になっている。

子どもたちの放課後を「多様化」する社会的な条件は、情報化が進んだ競争社会にあって他人よりも優れた能力を大人社会が求められているところにその一因がある。そこでは特に、子どもに対しては、競争において「即戦力とならない」人間関係を調整していく力や興味のあるものに対する主体的な取り組みよりも、勉強ができるとか、そろばんができるといったすぐに結果の見える実用的なものが、より強く求められる。「すぐに結果の見える実用的な」能力を子どもにつけることがいけないわけではない。それを優先するあまり、子どもが自由に使える時間が奪われ、結果として子どもが自分で考えたり、判断したり、行動したりといった自立への疎外状況が社会的につくられていることが問題なのである。

子どもをめぐる状況を考えていくと、親とそれを取り巻く社会的な状況が関連したものとして見えてくる。子どもをつかむということは、親の意識を方向づける社会的な要求をつかむことになり近くなってくる。「競争」という方向づけの中で親が困り込まれ、その生活に依拠する子どもたちが困り込まれていく状況では、親は子育ての方向でその自立性を失い、子どもは自分が成長することの方向性においてその自立性を失う。子どもをどうつかむかということと社会科教育の課題は、そこにあるのではないかと考えた。

3. 実践の展開

【自由勉強の呼び掛け】

4月の初め、学習の内容を自分で決めてそれを自由に表現する（決められた枠の中で自由に選ぶのとは違う）ことを勧め、朝の会などに発表してもらうことにした。子どもたちは、アリの様子や庭先にある堆肥置き場にカブトムシのさなぎがあったことなどを楽しそうに発表した。子どもたちにとって、ささいなことを自分で調べ、それが学校の中で位置付けられることは初めての経験であった。そして自由勉強の中で親が「働く人」と

して見えてきた時、それを社会科の学習内容に位置付けることにした。

【地域をめぐる】

〔自分の住んでいる所〕

社会科の最初の時間に自分の住んでいる所の好きなこと、嫌いなことなど、紹介するように書かせてみた。

すきなところは、れんげ草の中。なぜなら、かくれんぼうのとき、どこでもかくられるから。こわいところは、林の中。なぜなら、木の葉がさらさらなるから。(健)

ぼくのおうちには、公園やいろいろなものがあります。ぼくが一ばんすきなのは、公園です。ブランコやら、すべり台やら、てつぼうやら、ジャングルジムやら、小さなトンネルやらあるので一ばんすきなのは、やっぱり公園です。

海もすきです。海は青い色でとてもきれいし、上のほうから見るととてもよく見えます。それにすきなのは、じゅうたくのいろいろやらすきです。それにすきなのは、けんえい(県営)じゅうたくの子ども会です。子ども会では、おかしやら、ときどきそこで、ごはんやら食べます。じゅうたくで、ぼくが一ばんきらいなのは、じてん車ばこ(自転車置き場)です。じてん車ばこは、あそぶのがないのできらいです。(和也)

林の中にどうくつがありました。そしてどうくつは10こぐらいありました。一つのどうくつは、何もつづいています。ぼくは長くつづいてこわいと思いました。そして②のどうくつは①のどうくつと同じ。そして③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩のぜんぶも同じです。⑩のどうくつは⑨と⑧とつないでいるみたいに思いました。そして⑦⑥⑤④③もつづいています。①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩ぜんぶ、つづいているかもしれません。ぜんぶつづいていたら、ぼくはびっくりします。(弘和)

ぼくのおうちの前は、野球ボールがはいってすぐとりに行くと、おばあさんにおこられます。おじいさんもすぐおこります。だからぼくは、そこのおうちにあんまりボールを入れなくなりました。それでも、友だちが野球をしにくるから、ボールがとなりのうちにはいります。ガラスがわるるから、ぼくはいつもおこられます。(剛)

子どもたちが書いてくるものは、教科書の目標にあるような「地形」への関心や「地図づくり」への動機となるものは少ない。しかしここに出てきたような、それぞれの子どもたちが持っている地域の具体的な表象を切り捨てては、地形や地図づくりといった目標へさえも、意欲的には近づけない。またこうした地域の具体的な表象をもとに、地形や地図づくりへ学習を方向づけることは難しいことではない。

「健君の家の近くには何がありますか?」と問えば、「田んぼ」という答えはすぐに返ってきた。和也や弘和、剛にしても団地、公園、海、山、家といったものはすぐに出てくる。だから、慌てないで地域の具体的な表象を見せていくことにした。

【地域を眺める】

子どもたちを屋上に連れて行った。初めて上がる屋上に子どもたちは、はしゃぎながら垂水のまちを眺めた。方角と目印になる建物を確認して、しばらく自由に眺めさせた後、教室にもどった。

おく上から見て、南西の方に中おう病院が見えました。私は、学校からだいぶはなれてるように見えたので、びっくりしました。北には木や山がたくさんありました。南の方に市の体育かんが見えました。東には2年生のときいっしょだった、えび原さんのうちが見えました。ほかにもたくさんたくさんありました。(清美)

南は市の体育かんと寺と高校とほかいっぱいあったけど、ぼくの家は見えなかった。大きなたてものがあった見えなかったと思いました。北は、洋子さんの家があったり、木

があったり、花があったりしました。東は前、同じクラスの小野くんの家があった。西は船が動いていたり、スワン（店）も見えました。ほかにもいろいろあって、けしきがいいでした。東西南北であったものは、こいのぼりでした。（正弘）

教室に戻った後、次の時間からは屋上から見たものを実際に見に行くことを約束した。

【地域を歩く】

今日、私たちは垂水を見学しました。さいしょ、畑を見ました。次に麦を見ました。そして大廻先生が「麦はパンになります。」と言いました。そして駅に行きました。私は、まだかんばんがのこっているからいいなあと思いました。（千夏）

駅に行くときゅうにいろいろあった。あれ地のところには畑があった。ぼくはどうしてあれ地のところに畑あったのかなあと、ふしぎに思った。それから少し行ったところに麦畑があった。ぼくたちは、さいしょ米とまちがえた。（広夢）

いろいろな見学をしてさいごに、駅を見ました。さびついたかんばんもありました。それに駅にのこっている、汽車をまつところも見ました。ふしぎに思ったことがありました。なんで汽車を走らせるのをやめたのだろうかと言うことです。べつに走らせてもいいのになあ。（希美）

1987年3月、国鉄大隅線は廃止された。この子たちが1年生の頃である。大隅線の絶止、荒地（休耕田）は共に日本の社会の課題に直結する地域のであるが、この時点では広夢や希美の疑問を子どもたちに紹介するに留どめた。そしてしばらく社会科の時間は外に出歩くことを続けた。

市木に行くビニールハウスには小さなメロンがなっていました。メロンの花（黄色い花）もありました。メロンをさわってみたら毛が

はえていて気持ちよかったです。はしをわたるとき先生が「プレートを白い紙にうつしたら字がうつります」と言いました。先生がビニールハウスにいたおじさんに「何を作っているんですか?」ときいたら、おじさんは「インゲンを作っています」と言いました。また先生が「ビニールハウスは何まいかけていますか?」と言ったら、おじさんは「3まいかけています」と言いました。弥生さんが「ビニールハウスの横にある木は何ですか?」ときいたら、おじさんは「ビニールハウスがとばないようにひもを木でとめているんです」と言いました。また先生が「どこに出すんですか?」ときいたら、おじさんは「北九州とか関西に出します」と言いました。私は、いっぱい仕事があつてたいへんだなあと思いました。（清美）

学校から出発して川崎橋をわたりました。橋にはプレートがついていました。ビニールハウスがいくつもはってありました。ビニールハウスではメロンやインゲンやいろいろなものを作っていました。ビニールハウスの中で仕事をしていたおじさんにきいてみました。インゲンをうるのは「1月のすえから2月までです」といいました。4月15日から20日ごろまで作るのだそうです。冬があたたかすぎると、ちゃんとしたインゲンはできないんだそうです。こまることは桜島の灰だそうです。仕事ははだしてしていました。ビニールハウスの中はとてもあたたかかったです。（理恵）

3時間目、社会見学で市木を調べに行きました。どんなのを調べに行ったかという、「市木のビニールハウスに何がうえてあるか?」ということです。ビニールハウスにやさいやくだものがありました。ビニールハウスのお金はいくらかきました。1まい1万円だそうです。ぼくはビニールハウスにもしょうひぜいがつくんだらうかと思いました。ビニールハウスは高いけど、早くしゅっかができて高く売れるから、ビニールハウス

でやさいやくだものをそだてていることがわかりました。(健)

見学して子どもが感じたり、考えたり、知識として得るものには違いがある、だからこうして書かせたことを、発表することで子どもたち同士の視点を重ね合わせて、見たこと(ここでは農家)の表象を共有させるようにした。

今日、2時間目に商店のようすを見学に行きました。学校から右にまっすぐ行くと、しんごうきがありました。しんごうきからちょっと歩いて行くと、やっきょくがありました。また歩いていくと、ほっかほっかていがあった。それからずっと歩いて行くと、四ぶち商店がありました。四ぶち商店のとなりのとなりにはタイヤ屋さんがありました。またちょっと歩いて行くと、かめおか(洋服屋)がありました。かめおかの前の横だん歩道をわたって、左に行つて右に行つてまた左に行けば、市みんかんです。ぼくたちは、かめおかの前の横だん歩道をわたって右がわに行きました。ずっと歩いて行くと、ぎんこうがありました。また歩いて行くとキク書店があった。キク書店のとなりはまた、ぎんこうがあった。そのとなりには小ぞうずしがあつた。やっきょくの近くに南日本ぎんこうがあつた。南日本ぎんこうの前には、まるみ食どうがあつた。ずっと歩いて行くと(スーパー)キンコーもあつた。もう学校に帰るとき、「垂水ママ」(ストアー)もありました。ぼくは、店はいろいろあるんだなあと思ひました。(正)

私たちは2時間目に社会の見学に行きました。薬屋、谷口商店、ほっかほっかてい、それに花屋、おかし屋、神社がありました。お店は何げんもたつていました。四ぶち商店で、おばさんが外にいたので、私たちはおばさんにしつもんしました。「おばさん、このしな物は、ぜんぶどこからおくられてきたんですか?」ときくと、「これはね、市場からおくられてきて、たくさんのお店と半分に分けて

くるんですよ」といひました。私は「ねだんはどうやって決めるのですか?」ときくと「重さをはかつてねだんがっくのよ」といひました。私は、おばさんがぜんぶ言つたのをきいて、びっくりしてしまいました。そしておばさんに「ありがとうございひました」と言つてほかの店に行きました。私は、ぜんぶしつもんするのが心にのこりました。いつまでもわすれないように、おなかの中にためときたいです。(真)

駅、畑、ビニールハウス、商店街と見せてきたので、米作り(田)も見せようと思ひた。

ぼくたちは3時間目から田んぼの見学に行きました。田んぼにはイネがうえてありました。近くには用水路がありました。用水路には板がはめてありました。その近くに田んぼに通じる板みたいなのがありました。そこから田んぼに水を流してひました。一つの方は高くなつてひました。もう一つの方はひくくなつてひいて、高い方からひくい方へ水を流してひました。田んぼには、こんなところから水が流れてひいたのを初めてしりました。(大介)

田んぼのどては、水をちょうせいするためにある。田んぼに使う水を通すところを用水路という。田んぼでいらなくなつた水を流すところをはい水路という。田んぼは用水路に近い方が高く、用水路に近くない方は低い。苗のならべ方をくふうして育ててひいる。石のところ、ひっこめてあるところには、水を入れたり、木をはめて水を止めることもできる。用水路のところ、木をはめて、水を持ち上げて、田んぼの方に水を送つてひいる。その用水路は、ずっとずっと遠くまで続ひてひいた。田んぼの水は流れやすくなつてひいる。それは田んぼが、だんだん低くなつてひいるからだつた。(正)

今日、3時間目に見学をしに行きました。垂高グラウンドの近くの田んぼを見ました。先生が「左と右の田んぼのどつちの方が高い

か？」と言いました。左の人が一人か二人でした。右の方が多かったです。先生が「右」と言いました。それから田んぼと田んぼの間の細い道を通って見せてくれました。行くとちゅうの山のところにビニールハウスが見えました。だれかが「先生、その板、何ですか？」と言うと、先生が「これは水を押上げて田んぼの方に流します」と言いました。それを「用水路」と言いました。それから帰る時に先生が「君たちの足の下には、いらなくなった水をすてる、はい水路がある」と言いました。(紀一)

一連の見学の締めくくりに、近くで有機農業に取り組む農家を訪ねた。

今日、原田に行ったら、おじさんが来ました。おじさんは「少し大きくなったイネの赤ちゃんが出て来るよ」と言いました。おじさんが本当にむいたら、本当の米の少し小さいのが出て来ました。「イネをうえてから90日ぐらいで、イネかりをするよ」と言いました。それから「米と竹は同じなかま」と言いました。にているところは「米も竹も、ふしをもっているから」と言いました。それから、おじさんがうえて、ぼくたちにせつめいしてくれたイネは、「4月10日のうえて、だいたい8月15日ぐらいにイネかりをする」と言いました。ぼくは、おじさんはいろいろ知っているんだなと思いました。(正)

さいしょ、行くとき、たおれているイネがありました。そしておじさんが車で来ました。おじさんは話をしてくれました。そして「しつもんはありませんか？」と先生が言いました。みんなだまっていたけど、弥生さんとほかにも、いろいろな人が言いました。おじさんに「こまることは何？」ときいたら、「台風」と言いました。そして一ばんこまることは、雨がふらないと米ができないことを言いました。「今はあんまり米が売れない」とも言いました。そして、「だいじん(大臣)が『ねだんを下げる』」と言っているけど、米を作っ

ている人たちが『下げたらダメ』と言っているの、だいじんは、なやんでいます」とおじさんが言いました。そして「米の赤ちゃんは、けんびきょうで見ないとわからない」と言いました。ぼくは、そんなに小さいということがわかりました。(正弘)

地域にあるもの、人をしっかり見せていく。子どもに見せる視点を極端に限定することなく、それぞれの子どもの視点の違いや受け止めかたの違いを大事にしなが、それを授業で交流することで社会科の学習に自然に入っていく。1学期はこうして、見たことを書くことで、子どもたちが対象を受け止める力をつけていこうと考えて、実践を進めた。そしてこの間、子どもたちは地図作りで、自分たちが見た地域を対象化しだし、自由勉強も地域で働く自分たちの身近な人を取り上げ始めていった。

【地域をかきたい】

～健たちの取り組みとそれへの援助～

見学を続ける中で、健が「先生、地図をかきたいから画用紙を下さい」と言ってきた。画用紙を一枚やると友達と喜んで始め、やがて「もう一枚下さい」とやってきた。健は学校から自分の家の方向へ地図をかき始めた。ところが友達に参加することで、その子の家の方向へも地図を作らねばならなくなった。そして魚をかきたい子は早々に海(鹿児島湾)に向かい、フェリーと鹿児島湾でとれる魚をかき始めた。地形の特徴をつかむ地図の学習から見ると、少し目標からそれた感じもするが、フェリーと海の産物をかくことは、この地域の事実からそれたものではないので、そのままにしておいた。そしてこのクラスで初めての子どもたち自身による取り組みを発表させ、ほめてあげた。健たちの取り組みは、他の子どもたちの2500分の1の地図の色分け作業や中心街の地図模型づくりの取り組みを意欲的なものにした。

しかし他の子どもたちの取り組みが終わっていき、時間がたつにつれて、地図作りから離れる子どもが出始めた。初めの頃の目新しさをそこに感じなくなったのだろう。たくさん取り組んでいた子ども、最後には健が一人になり、やがてその健も

おくられてきて、小さく切ってからかねのはこに入れておきます。そしてトラックがはこんで行きます。そして会社のおじさんがブタの血をなべでにてかきまぜていました。それからブタがまたいっぱいきていました。

弥生たちの自由勉強を契機に、働く人、それ子どもたちにとって身近な両親や祖父母をテーマにしたものが多くなっていき、そうしたものを共同で絵や方眼紙にまとめることも勧めておいた。

「オクラ」(幸一)

ぼくの家は、じいちゃんとはあちゃんがオクラを作っています。毎日、朝5時にちぎりに行きます。オクラは6れつならでいます。1れつに約150本ぐらいとれます。きのうは、ぜんぶで912本とれました。オクラをとるときは、はさみとぐん手を使います。オクラは手でとると手がかゆくなるからぐん手を使います。オクラの長さは約13cmです。13cmぐらいのは、市場には出しません。なぜかという大きいのはかたいからです。短いのは7cmです。13cmと7cmのあいだぐらいのを市場に出します。パックに入れるのは下の左に4本、右に4本、ぜんぶで8本入れます。上も下と同じです。ぜんぶで16本パックに入れます。きのうのねだんは、1パック90円だったそうです。高いときは1パックで100円いじょうするそうです。安いときは20円ぐらいです。オクラのねだんは、市場にオクラがいっぱいきたときは安く、少ないときは高いです。

「もじゃこ」(麻琴)

4月25日から5月25日までモジャコとりがありました。海がたのじいちゃんの家は「たけし丸」という船です。たねが島の沖や、草がき島などの遠い所まで行って、モジャコをとってきます。トラックで大泊や枕崎からはこんで来ます。モジャコはめだかみたいなのから、タレクチ(イワシ)ぐらいの大きさです。大きさを五つぐらいに分けて、2mぐらいのあみに入れます。エサを食べさせて大きく育てます。大きくなると7mのあみに入れ

ます。さい初は、エサは食べませんが、1日たつと、エサをやるとすぐよって来ます。とてもうれしくなってまたエサをやります。エサを食べた魚は、おたまじゃくしみたいになります。休みの時は、エサをやりに行きました。大きくなるのが楽しみです。

お正月のころには35cmぐらいで1kg800gぐらいまで大きくなって「ハマチ」というそうです。大きくなるにつれて、名前がちがってくる魚だから「しゅっせ魚」というそうです。2年たつと80cmぐらいになって、5kgぐらいになって「ブリ」というそうです。ブリになって、出荷をします。ここには1ぴきずつ入れて、パーチ(ビニールの名前が書いてある紙)をはって、その上に氷をのせて、横にはキロ数をかいてトラックにつめます。大阪や東京方面につんで行きます。お正月には魚をたくさん食べられてとてもうれしいです。

「大きくなるのが楽しみです」と書いた麻琴の気持ちは、夏休みに入って間もなく襲ってきた台風11号によって砕かれた。多くの生けすが海に沈み、養殖は壊滅的な打撃を受けた。垂水市全体の被害総額は100億円を越え、100万匹の養殖ブリが鹿児島湾に逃げ出したと言われた。夏休み明けの作文には親の大変な様子をしっかりと見つめた文章が綴られた。

「台風のこわさ」(麻琴)

7月27日と28日に台風11号が来ました。強い雨や風がふいてこわいでした。朝、起きたらお父さんが「魚は大じょうぶだったかなあ」と言って、5時に家を出て行きました。「魚は、いけんもねかったか(どうもなかったか)?」と、お母さんが8時すぎに電話をすると、「いけんもねごあい(どうもないみたい)、今、見けいたっおっど(見に行っている)」とおばさんが言いました。「えかったねえ」と、お母さんは安心した顔で言いました。その後、電話は通じませんでした。8時半にニワトリ小屋に行こうとしたら、ポイントショップの所が水びたしになって車が通れませんでした。9時半すぎに、やっと水がひ

いて通れるので、お母さんとにわとり小屋に手伝いに行きました。小屋にひがいはありませんでしたが、たまごのよごれが多く、あらうのに大へんでした。3時に帰ってきたら水が出なくなって、きゅう水車が来ていました。バケツや、やかんを持って水をもらいに行きました。

ところが、海がたにもう一回電話をしたら「2年物は一つもないよ、全めつだよ」と、おばさんが言う「なあ！、げんにやあ」とお母さんは、がっかりした顔で電話のそばにすわりこんでしまいました。5分ぐらいしてから、「海がたに行ってみよ」とお母さんは言って、食べ物を持って行きました。海がたに行ってみると江ノ島の後ろの魚の生けすは全部なくなっていました。お母さんたちはおべんとうを作って、お父さんたちは自分の生けすをさがし回っていました。

8時ごろお父さんたちが帰って来ました。「みんなすごいよ。船もない人もいるよ」と言って、みんなで話していました。じいちゃんの家も生けすが6本なくなったそうです。「家が5けんぐらいたつんだよ」とお母さんから聞いてびっくりしました。みんなで300本ぐらいなくなったそうです。

次の日から、にげた魚をあみで取ったり、つって出荷したりしました。お母さんたちは、200人分ぐらいのべんとうを作り、お父さんたちは魚つりです。朝早くから夜おそくまでみんな一生けんめいでした。13日から自分たちでつってもいいことになったので、みんなで魚つりに行きました。海がたの沖やくぬぎばるの沖でつりました。つった魚は船の中に生かして、生けすの中に入れます。一ぴきでも多くつろうと思って麻琴たちも行きました。毎日、5ひきぐらいずつつりました。大きなブリなので上げられないので、お母さんが上げてくれました。つれた時はとてもうれしいでした。魚つりは、じいちゃんが一番上手でした。でも、もうあまりつれなくなりました。30せきぐらいの船が毎日来ているので、魚はもういないのでしょう。牛根や海がた、中また、市木では、土しゃくずれがあり、道

路まで土が来て通れなくなって、海がたと市木では、人が生きうめになっていました。台風は本当におそろしくてこわいものだと思います。台風はもう来なくてもいいと思います。

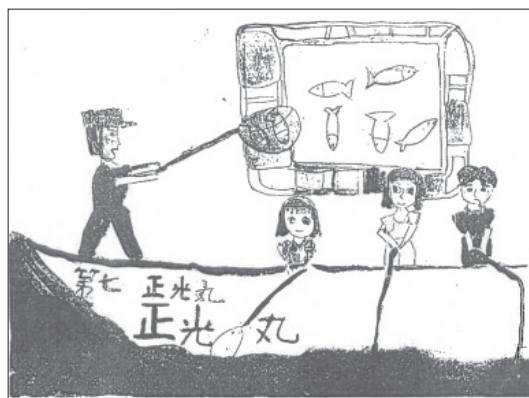


図4 台風で逃げた養殖ブリを家族で回収している絵

「台風に負けないお父さん」(真)

8月27日の夜、台風が来ました。風が「ビュービュー」と強くなって、木をゆらす音が聞えます。雨も「ザーザー」ふりつづいて、少しもやみそうにありません。時々、風にとばされた何かが、雨戸に当たる音がします。私は、こわくてあまりねむれませんでした。次の日の朝、起きてみると、近所の家のかわらやテレビのアンテナがとんでいました。市木の方を見ると、山がくずれている所がありました。お父さんたちの仕事場へ行ってみると、7つあった生けすが、流されて、5つなくなっていました。船は風の当たらない所へひなんしていたので、だいじょうぶでしたが、魚がいなくなったので、私たちは、かなしくて、くやしくてなきました。ようしょくをしているところの人たちが、海岸にすわりこんでないっていました。お母さんやおばあちゃんもなくていました。でも、お父さんが「心配しなくてもいいよ。仕事をがんばってくるからね」と言いました。その言葉を聞いて私も「勉強かんばる」と言いました。それからお父さんは今までいじょうに、仕事がいそがしくなりました。NHKのテレビ局の人たちを、お父さんの船に乗せて、にげた魚がどのへん

にいるか調べたりもしました。

にげた魚は、きんこうわん（鹿児島湾）にうずをまいて、たくさん泳いでいたそうです。しばらくしてから、にげた魚をつってもいいことになりました。お父さんやおじいちゃんたちは、毎日、かいしゅう作業に行きました。魚を1ぴき、1ぴき、きずをつけないようにつって、生せずの中にもどすのです。朝は4時から作業に行つて、夕方6時ぐらいに帰つてきます。生けすにもどる魚は少ないです。遠い海へにげたりしているからです。私は、台風なんかきらいです。お父さんの仕事のじゃまをしたのでくやしいです。でも、お父さんは台風に負けません。「こしがいたい」と言うけど、毎日、かいしゅう作業に行つて仕事をしています。私は、そんなお父さんが大すきです。体に気をつけて、ようしょくをつづけてほしいです。

麻琴の母親も真の母親も家業の厳しい状況を、「子どもが見たままに書かせた」と言った。生活をありのままに書かせたのは、私ではなく、母親たちだった。

2学期になつても単元の学習が地域の産業（働く人）を取り上げていたこともあつて、自由勉強は「はたらく人」をテーマにするものが続いた。

「レジの上手なお母さん」（亜希子）

私のお母さんはキンコーではたらいしています。キンコーのレジをやっています。私も大人になったら、やってみたいなと思ひました。キンコーは朝9時からです。お昼は1時からです。おわる時は、朝からだとして1時までです、お昼からの時は5時までです。4時間パートになります。キンコーの横の所をのぼつていくと、じむしょの中にはテレビがあります。そのテレビは、キンコーの中を見るテレビです。悪いことをしないように見るテレビです。お母さんの仕事は、お客さんが買ひ物をした物を計算し、お金をいただきます。もらったお金は、かならずかくにんします。えがおで、お客さまにあいさつをするようにしています。

一連の自由勉強の発表は、身近な親たちの働く姿をリアルに伝える。子どもたちは、表現された範囲ではあるが、それぞれの仕事の中身を知つていき、少しずつ「働く人」の表象をつかんでいく。子どもたちには、そうした表象の中から、働く人や異なる仕事の共通性を「生活を支える」という視点でとらえてもらいたいと考えたが、そうした認識に至る授業が構想できずに、そのまましておいた。

【地域を見つめる力は本物か？】

～単元「くらし商店がい」で問う～

子どもたちの自由勉強への取り組みは、決して全員が意欲的というわけではなかつた。それでも時折出てくる「働く人」をテーマにした自由勉強の発表を通して、楽しく学習したことは、子どもたちにとって、生活を問い直していく過程でもあつた。

そうした経験もあり、教師が子どもたちの調査を期待しながら、計画性を持って取り組む学習についても、自由勉強で見られた生活を問い直す力が発揮されるのではないかと考えていた。それを試す意味も含めて、2学期の後半に「くらしと商店がい」の学習に力を入れていくことにした。

【なぜ、「くらしと商店がい」か？】（実践のねらい）

この学習に力を入れたのは、先にも触れたように自由勉強とその表現活動を通して子どもがつけてきたであろう生活を問い直す力を、生活と結び付いたこの学習で見極めたいと考えたからである。「くらしと商店がい」の学習は文字通り、くらしの中から商業活動を問い直していく学習である。

子どもたちも私たちも行う、商品を「買う」という行為は、売る側の実に細かな商業活動を背景にしている。売る側からすれば商品を買わせるために商品の品質、量、価格の他、見栄え、販売方法（これだけでも多岐にわたる）などを考えた上で商品が消費者に向けられる。そして学習も「売る側」を見直していくことがその中心とされてきた。しかしこうした構造の学習だと、「くらし」に返る筋道がどうしても弱く、「くらし」へ結ぶ付けるためにはかなり無理をして、概念的に「商店街はくらしに役立っている」という具合にする

ことが見受けられた。教科書も導入として「くらし」は使われているが、すぐ「商店(街)」の方へ学習の中心が移ってしまい、最後にまた強引に「くらし」に戻そうとするため、そうした無理が起きた。だからこの実践では、考える位置を頻繁に移すのではなく、子どもたちが生活の中で常に立っている「買う」側から商店(街)やその商業活動を考えていこうとした。

「買う」という行為は、財貨の獲得、分配を経て何をどこで買うか(商品選択:これも安全性、量、価格などその基準は多岐にわたる)を決めて初めて「買う」行為に至る。勿論、そんなことをいちいち意識しない場合も多いが、「買う」という極めて日常的な行為の中に価値判断や社会的な諸関連があることはわかる。そこにある「買う」論理は、考え方ひとつで商品が異なってきた「買う」行為にも違いが出てくる。「買う」論理が厳密になると商品の選択基準や選択主体の比重が、買う側に強くなっていく。生協などはそうしたことの典型である。またこうしたことは商品の安全性の基準を厳しくしてきたし、それは「売る論理」にも影響を及ぼしてきた。

この学習では、その「買う」という行為から「売る」という行為にある論理(すでに意識的なことも含めて)に気付かせていこうと考えた。そうした意味から生活を問い直させようとし、授業の展開と同時に子どもによる生活の問い直し(調査)を期待して学習に入った。

〔実践の経過〕

- (1) 和也の作文発表「田中青果」
 - ・キンコーと田中青果は、どっちが売れそうか？(どっちが安い？)(予想)
- (2) キンコー、田中青果の見学(どっちが安い？:値段調べ)
- (3) キンコーと田中青果は、どっちが売れそうか？(調査結果を元にした話し合い)
 - ・何がわかれば「売ってる」ことがわかるか？
→お客の数
- (4) 田中青果は安いからキンコーに負けなかったのか？
 - ・値段、客数調査の結果→田中青果よりキンコーの方が売ってる
- (5) 売れないのにどうして田中青果はつぶれない

のか？

- ・つぶれない秘密はどこにあるか？(客か、店か、卸売市場か？)(予想)
- (6) キンコーと田中青果の見学(どうしてキンコー・田中青果で買うのか？)
 - ・田中青果はどうしてつぶれなかったか？
 - (7) 田中青果はどうしてつぶれなかったか？
 - ・事実の確認、まとめ
 - (8) 田中青果がつぶれなかったわけを表、絵、文章にまとめる。
 - (9) 田中青果がつぶれなかったのは、どうしてか？
 - ・これまでの事実をもとにつぶれなかったわけを話し合い、まとめる。
 - (10) 田中青果はキンコーに勝ってるか？、負けてるか？
 - ・これまでの事実を総合しながら考える。
 - (11) 自分が買うならどっちで買うか？(キンコーか？、田中青果か？)
 - ・いつもは、どっちで買うか？→生協の登場
 - (12) 生協とキンコー、田中青果のどこで買うか？
 - ・親、自分の「買う」論理を突き合わせて考える。
 - (13) おいしいみかんジュースを作ろう！
 - ・食品添加物で作ったみかんジュースと天然みかんを絞って作ったみかんジュースで、どっちがおいしいか？
 - (14) 学習のまとめ(レポートを書く)

〔動かない子どもたち〕

実践は、小規模専門店(田中青果)と大規模小売店(地元スーパー:キンコー)を比較する中で「買う」「売る」論理を意識していこうとした。そこで、和也の祖父母が経営する田中青果を和也に調べてきてもらって発表してもらおうと考えていた。和也にその旨を話したところ、恥ずかしそうに引き受けてくれた。

「田中青果」(和也)

今日、ぼくは上町のおばあちゃんの家に行きました。お店の方に行きました。おじいちゃんはいないでした。そのときは、おろし市場へ行っていました。それから帰って来ました。やさいをいっぱいつんでいました。それから

また市場へ行きました。それから富屋によって肉を買いました。そしてお店につきました。お昼からは、おじいちゃんはおつけ物をふくろに入れました。それがおわたたらタマネギのかわをむきました。むいた後は、はこに入れました。それからおじいちゃんは配たつに行きました。ぼくも行きました。フェリーの所でした。キャベツとか、いろいろありました。それからお店の方に帰りました。それからおじいちゃんは、また配たつに行きました。12時10分とか1時10分とか2時とか、その時間になったら行きます。だから、ご飯を食べるのは2時30分ごろです。それからぼくは、たまごつめの手伝いをしました。ケースに10こずつ入れました。2こあまりました。それから帰りました。

和也の発表の後、「キンコーと田中青果では、どっちが売れそうか？」ときいてみた。和也のおじいさんとおばあさんが経営していることもあって、田中青果が売れると思う子が22人、キンコーの方が12人と、予想に反して田中青果が多かった。そこで、どうしてそう思うか聞いてみたところ、「仕入れの市場からすぐ来る」(清美)、「新鮮」(広夢)、「腐った物が無い」(理恵)、「おいしいとうふがある」(弥生)、「家が近くにある」(希子)といった理由をあげた。一方、キンコーの方だと考える子どもは「品物が多い」(希美)、「人が集まる」(萌)、「人気がある」(正芳)といった理由をあげた。そこで、どっちが売れているか分かるためには、何がわかればいいのかを考えたところ、「安さ」ということで落ち着いた。次の時間までに子どもが調べてくることを期待して授業を終えた。

二日後の次の授業で、早速「どっちが安かったか？」ときいてみたところ、子どもの返事がない。誰も調べに行っていないかった。「くらしと商店がい」の第1時は、和也の発表もあり、授業も活発だったのに、どっちが安いかわかるところまでは誰一人として動かなかった。仕方なく気持ちを入れ換えて、みんなで調べに行くことにした。結果は断然、田中青果が安かった。真は「どうしてこんなに安いのか？」と驚き、母親がキンコーに勤める亜希子は「安くても売れるとは限らない」

と言った。

今日、5時間目にみんなで、キンコーや田中青果に行きました。最初にキンコーに入る前に、先生がいくつか注意しました。「中に入ったら、静かにする。お客さんにめいわくをかけない。パタパタ音をたてない」と言ってみんな入りました。キンコーのくだ物は200円から1200円まで、野さいは80円から198円です。ほかにもたくさんねだんがありました。次に田中青果に行きました。野さいのねだんを調べると、30円から250円ばかり。ほかにも高いのがあると思います。となりの店を見るとみかんが1つくさっていました。やっぱりキンコーは高く、田中青果は安いから売れると思う。(千夏)

今日、5時間目にキンコーと田中青果を見学に行きました。キンコーの野さいのねだんは、ふかねぎが120円で、きゅうり1パック150円で、いんげんまめが200円で、バナナが221円で、みかんは280円でした。田中青果は安い物ばかりだったので田中青果の方が売れると思ったけど、安いからといって田中青果の方へ行かない方がいいと私は思いました。私はキンコーの方が人が集まるし、田中青果は人が少ないからキンコーの方が売れると思います。今日、行った時、キンコーは人が集まっていて、田中青果に行った時は2、3人しか来ていなかったの、キンコーの方が売れると思います。(亜希子)

田中青果はきゅうり5本で100円、キンコーは5本で238円、田中青果の方が安い。私は田中青果が売れそうと思う。にんじんも7本で100円、ブロッコリーも田中青果は1こ150円、キンコーは1こで180円もする。なすびもキンコーは2本で180円、田中青果は1本で50円、とても田中青果が安い。お客さんも1日に30人ぐらいも来るそう。小さい店なのに30人も来るから、やっぱり田中青果だと思う。(希子)

キンコーはかぼちゃは190円で、玉ねぎが250円で、じゃがいもが78円で、ふかねぎが120円で、きゅうりが150円で、ピーマンが200円で、バナナが220円で、みかんが280円でした。田中青果はだいこんが100円で、キャベツが50円で、みかんが100円で、ほうれん草が50円で、はくさいが150円で、かぼちゃが30円で、にんじんが100円で、トマトが150円で、ふかねぎが150円で、なすびが50円で、花やさいが300円で、たまごが190円で、ピーマンが100円でした。私は田中青果が安いから、キンコーは負けるかと思いました。でも、真さんたちが「でも、安いからたくさん売れることじゃないよ」と言いましたけど、私は、どうも気になりました。(加奈子)

私は、やっぱり田中青果が売れると思います。行った時はだれ1人いなかったけど、配たつすれば、いっぱい売れると思います。それにキンコーに行くと2本、3本とサララップでつつんであるのばかりでした。そして田中青果は「新せんだ」と言っていたし、安いし、田中青果のばあい、きゅうり40円、なす100円、かぼちゃ150円、とうふ100円、玉ねぎ50円、はくさい150円、ブロッコリー50円、レタス100円でした。それにいい物がいっぱい大きい物ばかり。それに調べる時「はくさいは？」と思ってさがしていたら、ぱっと見つけやすいでした。私はこんな店が大好きです。もっとこんな店ができればいいな。(洋子)

〔「売れる」ということは？〕

子どもたちは「安さ」を調べてその事実を突き合わせて考えたわけだが、「キンコーが売れる」と思っていた子どもたちには「スーパーの方が当然売れるだろう」という思い込みがあった。しかし、値段を比べてみると、ほとんど田中青果の方が安いことが分かり、亜希子の意見となった。亜希子は「安くても売れるとは限らない」と考え出した。そこで次の時間は「田中青果の方が安い」という事実をもとに「売れる」ということについて考えていくことにした。「田中青果の方が安い」

という事実、亜希子の意見を紹介した、「どうしたら売れてることが分かるか」考えてみた。子どもたちは「いくら売れたか」と「お客さんの数」を挙げた。

ぼくは「安い」ことは「売れる」ことだと思っています。(健)

『「安い」ことは「売れる」ことか?』とでたとき、希美さんが黒板に書いた「洋服や道具が売っているからキンコーが売れる」ということはないんじゃないかと思った。なぜかという、やさいが売っているから、やさいで人をよぼうとしているんじゃないかなあと思ったからだ。でも、洋服とか買いに来る人もいるかもなあと思って気になった。(希子)

「安いことは売れることか?」と言っているけど、安いからって売れることじゃないと思います。キンコーの方がやっぱり売れると思います。田中青果は新せんだからといって売れるとはかぎりませんから、やっぱりキンコーと思います。(紀一)

健と紀一は全く反対の意見を出し、希子はキンコーの総合性を気にしながらも、田中青果の野菜の専門性に目を付けて「売れる」ことの理由にしていっていった。

〔田中青果はなぜ、つぶれないか?〕

～追究する課題の設定～

「田中青果は安いからキンコーに負けないのか?」の検討の中で、紀一と剛が田中青果とキンコーの売り上げと客数を調べてきた。

11月18日の売り上げは、田中青果が約3万円、キンコーが約320万円。客数は10分間に田中青果が1～2人、キンコーが約5～10人ということだった。この調査結果をもとに田中青果よりキンコーが売れていること、しかし田中青果はつぶれていないことを授業の中で確認した。

キンコーは売れているけど、まだ田中青果はつぶれていない。ぼくたちが調べたけっか

で、こんなに出てくるとは知りませんでした。田中青果は3万円ぐらいで、キンコーは320万円で、317万円のさがあるなんてはじめて知りました。(紀一)

今日のじゅぎょうではキンコーの方が売れることが分かった。私はキンコーの方が売れると思っていてよかったと思います。でも田中青果がつぶれなかったわけが分かりませんでした。(亜希子)

売り上げはキンコーが売れる。キンコーのばあいはやっぱり店が広くて、品物もたくさんあるからキンコーは売れる。でも、なぜ田中青果はつぶれないのか。(大介)

今日のじゅぎょうをうけて心の中で「やっぱりキンコーがかった。うれしい」と思いました。キンコーの1日の売り上げが320万円で田中青果が3万円って分かったとき「田中青果に買いに行ったこともないのに、おうえんしていた人を見返してやりたい」と思いました。だけど、売り上げが少ないのに、どうしてつぶれないのかなあとぎもんに思った。(希美)

この授業で、キンコーの売り上げは店全体の売り上げだから、野菜だけのものじゃないと分からないという意見が出た。紀一は早速、キンコーの野菜だけの売り上げを聞いてきた。「約30万円」だった。ただ一人、調べに回る紀一を見ながら、なんとか他の子も本気で調べられないかと考えていた。幸い、授業では客数も売り上げも少ない田中青果がどうしてつぶれなかったのかが希美たち

によって問題にされていき、他の子どもたちもそれについて考え始めた。つぶれない秘密はどこにあるのか、それは店の工夫や努力も含めて「売る論理」に近づいていくことになる。私は図5をかき、この図のどこにつぶれなかった理由があるのかきいてみた。

どうしてつぶれなかったか？、むかしからやって、今も生活できるからだと思う。3万円でも田中青果のおじちゃんたちにとって高いお金なんじゃないかなと思う。それに毎日3万円ぐらいもうかるんだったら、ほかのところよりは、ましだと思います。だから田中青果はつぶれないと思います。(希子)

今日の4時間目は「田中青果がどうしてつぶれなかったか？」ということでした。一つの答えはチラシでした。田中青果はお客がくるからつぶれないのかどうしてもわかりません。もうかるのか、売れているのか、どっちかもわかりません。どうやったらカギをとけるか心配です。お客とお店に何かかくされているヒミツをとくことができるか？、キンコーはチラシを出しているけど、田中青果はキンコーみたいにチラシを出しているかわかりません。幸一君は「キンコーは会社だ」って言うけど本当にキンコーは会社なのかかわかりません。キンコーが会社なら田中青果も会社なのか？。それを頭の中で考えていたら、幸一君が発表して「田中青果は会社じゃない」と言ったので、なぜ、キンコーだけ会社で田中青果は会社じゃないのか意味がわかりません。それに「田中青果はなぜ、つぶれなかったか？」ってということもわかりません。二つ

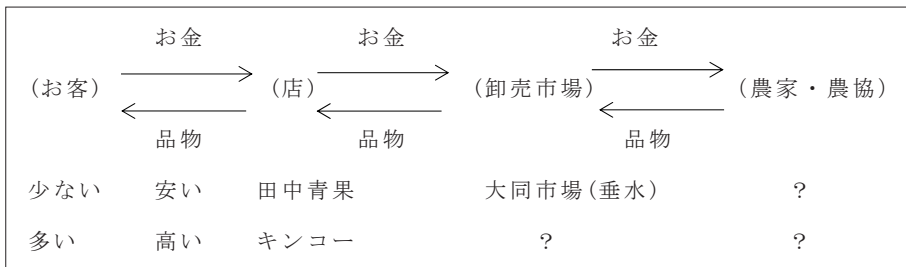


図5 店とお金と品物の流れ

の意見は、私は自分でかいけつできるか心配でたまりませんでした。(亜希子)

私は自分でつぶれるか、つぶれないかはわからないけど、「生活できる」というのは、もう知っているか、売れているかどっちかです。でもなんでキンコーの方が売れるのかわからない。田中青果は安いのに売れないで、キンコーは高いのに売れています。どうしてだろう。(理恵)

田中青果はむかしからやっているし、キンコーは3年しかやってないから田中青果は負けてない。田中青果は安いし、しょうひぜいもつかない。キンコーは高いのになぜ1日に320万円も売れるんだらう。やっぱりキンコーかなあ？、どうもわからない。でも田中青果がつぶれていないことは確かです。田中青果はむかしからやっているけど、キンコーは3年前にできて田中青果は売れないんだらう。キンコーはやっぱり広いからかなと思います。でもキンコーがまだできていなかったとき、田中青果は売っていたのかなとふしぎに思いました。でも田中青果は売れないわけじゃありません。田中青果は1日に3万円ぐらい売れるから、売れないわけじゃないし、田中青果とキンコーのちがいはどこだらう？。そのカギは何だらう。そのカギがわかればいいのになあ。ぼくはどっちにいけばいいのかわからなくなった。いったい、どっちなんだらう。(新一)

子どもたちの感想を見ていると意欲的に見えるのだが、放課後の「忙しさ」の現実は大きく、時間をさいて調べに行こうとする子どもは全くいなかった。この実践をこれ以上続けるべきかどうか迷ったが、「田中青果はどうしてつぶれなかったのか？」その答えだけははっきりさせておきたかった。そこでもう一度、子どもたちと聞きに行くことにした。

田中青果に来てたお客さんに先生が「なぜここに来るんですか？」と聞いたら、「新し

いし、安いから」とこたえました。こんどは、私が店のおばちゃんに聞きました。「今までにつぶれることの話をしたことありますか？」としつもんしたら、「ない」といいました。それに朝6時30分から夜8時までやるそうです。私はお客さんが言った通り、新しいし安いから、お客さんが来てくれてもうかるからつぶれないと思います。(希子)

今日の5時間目に「どうして田中青果がつぶれなかったか？」で調べに行きました。二人のおばさんがいて、そのおばさんは毎日来るのです。「どうしてつぶれなかったか」が分かりました。それは安いし新しいからです。田中青果のおばさんは「1日に30人来る」と言います。1日に3万円たまるけど配達を合わせればもっとたまる」と言いました。紀一君と剛君が調べに行ったときは、お客さんは1人といいました。でも今日は2人でした。(清美)

みんなで田中青果に行った。「むかしはよく売っていた」と聞いた。お客さんに聞いたら、くだもので言えば、安いし、新しいし、つまり新せんだってことだと思えます。おばさんは「むかしから売っていたからつぶれない」と言った。でも何で売れたかな？、その中みがわからない。おばさんは「店をやっててよかった」と言っていました。(理恵)

今日、社会で田中青果を見学に行きました。まず、さいしょ、お客の人に「なぜここで買うのですか？」ときいたら、「新しい品物で安いから」と言いました。次につぶれなかった理由をききました。お店のおばさんは「売れるから」と言いました。ぼくは『『売れるから』じゃあ、わからないなあ』と思いました。こんどは1日に何人くるかをききました。1日に30人ぐらいくるそうです。ぼくは、つぶれなかった理由をくわしくききたかったです。(健)

私は見学して、どうしてつぶれなかったか

分かりました。田中青果は朝の6時30分から夜8時まで、いっしょうけんめいはたらくのに、それにくらべてキンコーは朝9時からよる8時までで、あんまりがんばっていないのに、1日に320万円ももうかっているというのは、田中青果はちょっと、くろうしたかいないなと思いました。そしてびっくりしたのは、昭和23年から田中青果はやっているということです。それに田中青果にきていたお客さんに聞くと、「ほとんどの日が田中青果に買いにくる」と言っていました。田中青果のおじさんとお婆さんのどりよくが店のはんじょうにつながって、つぶれないようにしていることがわかりました。(希美)

子どもたちは田中青果がつぶれなかった根拠を見たり、聞いたりした事実から持つようになった。しかし、その事実に対する評価は分かれた。希美は田中青果の営業時間がキンコーより長いことと店の歴史をもとにそこに田中青果のおじさんとお婆さんの工夫と努力を感じたわけだが、健や理恵は希美と同じことを聞きながらも、お婆さんの「売れるから」という答えに満足せず「田中青果がつぶれなかった」答えを持ち得ないでいた。

子どもたちが田中青果の具体的な商業活動に着目し始めたので、和也の自由勉強「田中青果」をもう一度、読み聞かせて、「田中青果はどうしてつぶれなかったか？」について自分の意見をまとめさせた。最初の発表の時とは違い、内容から田中青果のおじさんとお婆さんの仕事を丁寧にとらえられた。

キンコーと同じ物が田中青果にもあります。初めのときは、あんまり分からなかったけど、今はもうたくさん分かってきました。今まで「新せんだし、安いから」と紙に何回も書いていました。紀一君と剛君が調べてきたときは、人数のことで勉強しました。人数ことではキンコーの方が来る人が多いでした。でも今も、田中青果はつぶれていません。田中青果はむかしからやっているからだし、今でも人がときどき来るときもあるからです。(清美)

田中青果は野さいのほかにもカレーとか、しょうゆ、マヨネーズ、ほかにもいっぱい売っています。とうふは水につけてあるものばかりです。田中青果はみんな安い物ばかりです。何で安いのかなあ？。きゅうりはふくろに7本入っています。トマトもふくろに3こぐらいです。田中青果は、なぜつぶれないのかなあと思いました。お客さんが来るから売れているのかなあと思いました。田中青果は食べ物を中心に売っています。田中青果は食べ物だけで人をよんでいるのかなあと思います。(孝子)

田中青果にこの前、行ったときに、お客さんがいました。そして聞くと「よく買いに来る」ということを言いました。「売れる」ということだと思います。お客さんは「安くて新せん」とかも言いました。キンコーは配たつがない。だけど田中青果ではチラシがありません。田中青果にチラシがあれば、売れるかもしれない。朝のときは売れて、キンコーが開くと、少し人が来なくなると思います。チラシがあれば、いっぱいの人 comes と思います。むかしは売っていたかもしれない。今はキンコーができてから、あんまり人が来ないと思います。(正弘)

「田中青果はどうしてつぶれなかったか？」、私は何回もそのわけを考えたことをまとめてみました。まず、田中青果は食べ物を中心にしているから、お客さんも見やすいし、店の人に聞くこともできて、早く買い物がすむことも、つぶれない一つの意味だと思います。それに昭和23年からしているので、近くにおばあちゃん友だち、おじいちゃん友だちなどたくさんいて、そのみんなが田中青果に行っていると思います。それに朝早くから夜おそくまで本当にたいへんだと思いました。私だったら、そんなことはできないなあと思います。すごいなあと思いました。(希美)

子どもたちは「田中青果はなぜつぶれなかったか？」を考える中で、営業時間、配達、商品の種

類、宣伝、客とのつながり、といった商業活動をキンコーとの関係の中で位置づけ直していった。

〔「思い」を表現する〕～動きだす子どもたち～

希美はこの学習の初めに「田中青果よりキンコーの方が売れる」と考えていた。しかし田中青果がつぶれなかった理由を考えていく中で、田中青果のおじさん、おばさんの働く姿を見たり、店の具体的な商業活動にふれて、田中青果に気持ちを入れ込んでいく。そこで田中青果の紙芝居を作ることを勧めると喜んで取り組んだ。清美、希子を加えた3人は田中青果の卸である大同市場にまで調べに行き、立派なものを作り上げ、発表した。

「田中青果の1日」希美、清美、希子

おじさんは品物をはこにしっかりとめ、はこの口にガムテープをとめ、自分の車につきました。そしてさいごの品物をつみおえると後ろのドアを「バタン」としめ、自分も車に乗りこみ、配たつに行きました。まず、田中青果に近い所から先に配たつします。配たつが終わって、田中青果に帰っても仕事はまだあります。次の仕事は仕入れに行くことです。大同市場につくと、おじさんは、みかんやりんご、バナナなど安い物をたくさん買うそうです。仕入れた後に、フェリー乗り場に配たつに行きます。次に、みよし食堂にも行きます。配たつか終わって、田中青果に帰ると、おばさんは「ごくろうさま」と言います。次はホースをのぼして水を出し、野さいをきれいにあらいます。野さいをあらっている時に、お客さんがきても、おばさんがお客さんに「いらっしゃいませ」と言い、レジもきちんとしています。お客さんは帰る時、ニコニコ顔で帰っていきます。そんな顔を見ていると、おじさんもおばさんもうれしそうに「ありがとうございます」と言って、ニコニコわらいます。田中青果の野さいや、くだ物は安くて、新せんできれいなので、お客さんたちは安心して買い物ができます。

午後からどんどんお客さんがふえてきました。おじさんとおばさんは少しいそがしくなってきました。だけど夕方ごろから人が少な

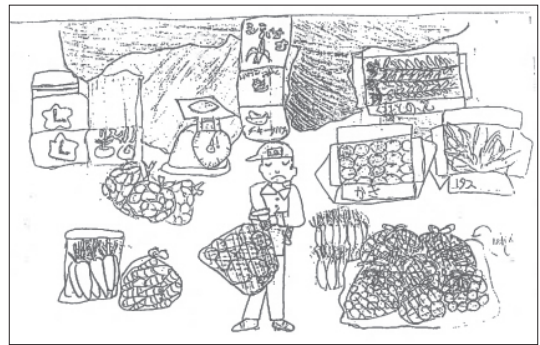


図6 紙芝居「田中青果の1日」

くなってきました。キンコーはまだ、人がたくさんいます。田中青果は、しめる時間になっても10分くらい開いています。人がすっかりいなくなると、やっと、おじさんとおばさんがゆっくりできる時間です。とうふの水をぬいたり、木で作った戸をたくさんしめたりして、おばさんたちの一日の仕事が終わります。おじさん、おばさん、ごくろうさま。おわり。

発表の後、「田中青果がキンコーに負けなために一番大切な場面はどれか？」ときいてみた。すると私が予想した配達よりも、仕入れや野菜を洗う場面を子どもたちは挙げてきた。地元の御市場から朝早く仕入れくることに野菜の新鮮さを見だし、それを一つ一つ洗うという仕事が田中青果の商業活動の中でスーパーに対抗するものと考えたのである。

子どもたちの意見が出尽くした後、私はこれまでの子どもたちの取り組みをほめて、田中青果のおじさんとおばさんが、これまでどのように過ごしてきたかをまとめたプリントを配った。子どもたちは既に、田中青果について多くの表象を持っているから簡単に読みこなしていった。

「田中青果のおじさん・おばさんの話」

田中青果のおじさんとおばさんは、1948年(昭和23年)に今のシオヤしゃしんかんの前にゲタ屋をひらきました。でも、ほかにもゲタ屋があったことや食べ物がよく売れそうだったので、1950年(昭和25年)ごろに今の場所でやさいやくだものを売るようになりました。そして店に来るお客さんのほかにも品物をとどける配たつも始めました。こうしてお客さんもふえてなかなかよく売れました。

ところが、1963年(昭和38年)に今のキンコーのあるところに大きなスーパー美好屋(みよしや)ができ、1975年(昭和51年)ごろには桜デパートもできるとお客さんの数もへり、売り上げもへってしまいました。そこでおじさんとおばさんは配たつを少しずつふやしたり、やさいやくだものほかにも、カレーやマヨネーズなど、よく使い、すぐ売れる品物もふやしていきました。通り会の人たちも力を合わせて大売り出しの日を決めたり、いっしょにチラシをだしたり、スタンプ会を作って垂水にすんでいる人たちが通り会で買い物をしたくなるようにもしました。

しかしとつてもこまったことがおきました。美好屋のあとに、あの大きな会社のキンコーができることになったのです。通り会のたくさんの店や田中青果のおじさんとおばさんもお客さんがへったり、売り上げが落ちることを心配して反対しましたが、1986年(昭和61年)にキンコーが垂水にできました。

田中青果のおじさんとおばさんが心配したように、キンコーができてからお客さんがへって、売り上げも落ちてしまいました。でも、みんなが調べたように店をやめる話はしたことがないそうです。おじさんとおばさんは店を始めたころから少しずつ配たつをふやしていき、今では店に買いに来るお客さんより、配たつのお客さんがいるおかげで店がやっつけられるそうです。しかし、この店でよく買ってくれる「おとくいさん」のお客の人たちのことをわすれたわけではありません。店に来るお客さんが気持ちよく買い物ができるように灰(はい)がかからないようにしたり、やさいをきれいにあらったりするのは、今もむかしも大切な仕事だそうです。

けんきゅうじゅ業は社会でした。紙芝居の絵でやりました。(田中青果がキンコーに負けないために一番大切な場面は)2番(仕入れの場面)と6番(野菜を洗う場面)だと私は思いました。だって2番は野さいが売れた時、野さいやくだ物を取りにいかないと、あんまりなかったらお客さんが買えないから。6番は灰が垂水にきたりすると野さいやくだ物にくっついたりするから毎日きれいにあらう。さいしょは2番の方が6番より大事だと思っていたけど、6番にかわって、どっちとも理由を出しても、やっぱり両方だと私は思います。(理恵)

今日、紙しばいをやり、その後に紙しばいについて勉強しました。私たち。中に番号を書き、2番と4番を選びました。その次にほかのはんで出た2番と6番で考えてみました。その後で先生が「2番と6番ではどっちが大事か？」と

言って調べました。その後に配った紙を読んで本当は6番でした。でも、私は6番とはかぎらないと思いました。2番でもあると思いました。(清美)

子どもたちが、田中青果、キンコー、それぞれの商業活動を総合的にまとめ直すために「田中青果はキンコーに勝っているか、負けているか？」を問うことにした。ここまでの事実を通して判断することでまとめさせようとした。

【授業の記録「田中青果はキンコーに勝っているか、負けているか？」】1989年12月6日

T: この前の研究授業で、みんな良くがんばったんです。みんな良く書いています。希美さん発表したとか、亜希子さんがおもしろいことを書いていましたね。「キンコーと田中青果では売り方が違う」と。

- C：同じだよ (弥生)
T：そうですかねえ？
C：うん！ (弥生)
C：違うよ。売り方違うよ (洋子)
C：同じだよ (弥生)
C：同じじゃないよ，キンコーって配達しないもん。(洋子)
T：はい，こう書いていますよ。「田中青果とキンコーは売り方や安さが違うし，田中青果とキンコーは自分達で売り方を工夫しているのだから，自分達の工夫が違うと思います。授業で誰かが『キンコーは一度売った物をまた売っている』と言いましたが，キンコーは棚卸しなどをして替えています。キンコーは一度売った物は売らないです」，一度売った物は売らないですね。どういう意味ですか。希子さんが言ったのは…。売れ残った物を売っているということですね。じゃ，田中青果はそうしませんか？。田中青果は8時頃行ったら全部売れていますか？。
C：いいえ。全部売れてない。
C：でもラップに包んであるもん，キンコーのは。(希子)
T：うん，包んであるね。じゃ，聞きますね，田中青果はキンコーに，
C：負けてる！ (幸一)
T：負けなかったんでしょかね，勝ったんでしょかね？
C：負けなかった！ (弥生，健，他)
T：負けなかったのは，どうしてですか？
C：やっぱり負けた！ (幸一)
T：負けた？
C：うんにゃ，負けなかった！，負けなかった！，手，挙げさしてん！
T：じゃ，負けてると思う人！
C：はい！
T：勝ってると思う人！
C：はい！，はい！
T：圧倒的に多いですね。
C：亜希子さんはどっちなの，負けてる，勝てる？
T：どっち？
T：「田中青果はキンコーに勝っているか，負けているか？」(学習問題板書)
C：「田中青果はキンコーに勝っているか，負けているか？」，「負けている1匹」って書いてよ。(幸一)
T：「幸一」
C：ハハハ。
C：1匹。(幸一)，先生，幸一君の見方でいいんじゃないの。(弥生)，先生，答え言ってね。(幸一)
T：答えなんてないよ。
C：なんだ，こんなの。答えなかったの，おもしろくない。(幸一)
T：田中青果が勝っているという人が1人。キンコーが勝っているという人が35人。
C：「田中青果が負けてる」って言ったよ，おれ。(幸一)
T：逆に言えばキンコーが勝っているでしょ。
C：逆に言えば，田中青果がキンコーに勝ってる。(弥生)
T：田中青果がキンコーに勝ってるか，負けてるか？・・・負けてるが35人。
C：先生，洋子，「負けてる」方。(洋子)，ダメだよ！，あっ，ダメだよ！ (幸一)
T：いいの！，何で「ダメ」ね！，自分ばっかりじゃないの！
C：そうだよ！
T：はい，もう一回手を挙げて！
C：亜希子さんもだつて。(弥生)，亜希子さん，お母さんがいるからだよ。
T：田中青果はキンコーに負けてると思う人，手を挙げて！，1，2，3・・・18。
C：すごい！ (幸弘)，負けてない！ (理恵)，いきなり多くなっていく。(幸弘)，田中君が手をあげた！
T：はい，勝ってると思う人！
C：はい！，はい！
T：1，2，3・・・17。
C：田中青果の場合，ずっと前からやってるんだよ。(健)
T：はい，理由を言って下さい。
C：あ？，理由？。(幸弘)
T：はい，健君。
C：田中青果は昭和23年からやっているから，キンコーよりやっているのが長いから，田中青

果は負けてない。(健)

T:なるほど、キンコーよりやっているのが長いね。

C:25年だよ、げた屋やってたんだよ。前まで。(洋子)、先生、清美さんが「勝ってる」って言うんだって。(紀一)、逆転しました!(幸弘)、おれ、やっぱり「勝ってる」方。(幸一)

T:「店の歴史」っていう言葉でいいかな?、田中青果は昭和23年から今年で41年。キンコーは何年ですか?・・・昭和61年からだから3年ですね。3年だ。

C:おれ、18人の方に入るよ。やったあ!、勝った!、人数が。(幸一)

C:そんな多数決じゃ、決まらないよ!(健)

T:多数決じゃないよ。まず、健君は田中青果がずっと昔からやってきているから、キンコーに勝ってるというんだね。

C:やっぱり、おれ、「負けてる」方、先生。(幸一)

T:はい健君、確かにキンコーができるまでは、そうでしたね。キンコーができた後も勝っているんですか?・・・いろいろ調べたね。

C:ちょっと考えさせてよ。(健)・・・

T:はい、健君。

C:はい、キンコーができるまでは田中青果の方にみんなは行ってたけど、キンコーができてから、キンコーに人々がみんな行って、田中青果は負けてきた。(健)

T:うん、ということは、キンコーができてからはどうなの?

C:負けてる。

T:「負けてる」っていうわけでしょう、結局。キンコーに負けてるか、勝ってかを聞いているんだよ。はい、もう一回聞きましょう。勝てると思う人、手を挙げて下さい。

C:はい!

T:1, 2, 3・・・20人。

C:ウ〜。勝った!、ヤッター!、

T:じゃ、負けてると思う人。

C:手、挙げないでくれない?(幸一)

T:1, 2, 3・・・15人。

C:ヤッター!(弥生)、15だった。やっぱり。だって余った人だもん。(洋子)

T:さてさて、理由を言ってみよう。今、「古さ」

だけしか出ていません。

C:先生、健君はどっちなんですか?(弥生)

T:健君、どっち?

C:・・・(健)

T:はい、じゃ、20人(負けてると考える)の人!

C:新しい!

T:はい、希美さん。

C:近くの大同市場から仕入れてきているから新しく、新鮮!(希美)、ほらあ、「新しい」って言ったよ!(幸一)

T:新しく新鮮。はい清美さん。

C:はい、月曜日に先生が配った紙には、キンコーがまだできていない時は、配達をしていたけれど、キンコーに負けそうだから、配達を始めた。・・・?(清美)

T:ああ、増やしたんですね。・・・配達がある。キンコーにはない。だから清美さんはどうだった?

C:勝ってる(清美)、

T:「勝ってる」っていうわけね。どうですか?、ほかの人!

C:勝ってる!、勝ってる!、

C:先生、変える!(健)、変える!、変える!

T:変える?、どっちに?

C:勝ってる方。(健)

T:だったら理由をちゃんと言わんと。

C:付け加えていい?(清美)

T:うん、付け加えていいよ。

C:配達の方が店で買う人数が多い。(清美)

T:田中青果には配達があるからね。これが多いんだ。

C:キンコーは記達がなくて、田中青果は配達があるから、あの・・・配達で売れるのを田中青果が勝てば、キンコーには勝っている。(弥生)

T:はい、じゃいいでしょう。もう一回聞きますね。勝てると思う人?

C:はい。

T:負けてると思う人?

C:はい。あれ!、少なくなった。(紀一)

T:はい、じゃあね、勝てると思う人はこっち側に集まって、負けてると思う人は向こう側に集まって話し合ってください。

- C：(移動、話し合い)
T：はい、まとまった方は先に座って下さい。
C：(話し合いをやめて席に着く)
T：はい、そいじゃ、発表してもらいましょう。
C：はいー！。
T：そいじゃ、まず、理恵さん。
C：キンコーは農薬とか、いっぱいかかっていて、きれいだと思わせて・・・田中青果は農薬とかあんまりかかっていなくて、ちょっと虫が食っているからきれいな方を買う。(理恵)
C：失礼なこと言うね！(弥生)、失礼な！、失礼な！。虫とか、そんなのがついているんだったら、田中青果では買わないよ！(弥生)
T：反対意見！。
C：はいー！
T：はい、弥生さん。
C：理恵さんのその問題は、田中青果は大同市場では、虫が食べたりしていたら買わない。(弥生)
T：はい、ほかに！
C：反対意見とかじゃないけど。(希子)
T：はい、希子さん。
C：大同市場はきれいなだけ置いてある。(希子)
T：きれいなだけ置いてある。
C：大同市場に行った時、くされたのもあった。(幸一)
T：あった？、さあ、どうなんでしょう。
C：きれいすぎて虫が来ない。(洋子)
T：う～ん、え～と、希美さん。
C：朝早くから夜遅くまで一生懸命。(希美)
T：～やっているから？・・・時間かな？・・・はい、清美さん。
C：大同市場はくされてると新鮮なのを分けて売っている。(清美)
C：売ってないよ(幸一)
T：大同市場は分けてるはずだ。
C：はい！、先生。
T：洋子さん。
C：反対意見じゃないよ。前、紀一君が調べた時、キンコーは10分間に何人だったっけ？、忘れた！
T：10分間に5人から10人。
C：うんうん、そして田中青果はそれより少なかっ
たから、キンコーがってると思います。(洋子)
C：でも、その後からいっぱい来たかもしれないよ。(広夢)
C：先生！(麻)
C：くされてるとくされてないのは分けてないよ、(幸一)
C：はい！
T：はい、希子さん。
C：清美さんが言った通り、大同市場に見学に行った時、みかんもくされてるとくされてないのと分けてありました。(希子)
T：おお、分けてあった。
C：その時、行っただけで何言うの！、分けたとこ見たことある？(幸一)
C：それに汚いのは隅の箱に入れてありました。(希子)
T：ああ、まあ理恵さんの言ったのは、そういう意味じゃないと思うんですがね。
C：先生、キンコーの時間どうすんの？、書かないの？(紀一)
T：ああ、キンコーの時間ね。キンコーの営業時間は朝10時から？
C：朝9時半！
T：9時半から？
C：夜8時まで！
T：8時まで。
T：じゃ、はい。どっちが勝っていますか？(板書の表で比べる)、ちょっと見てみましょうね。古さ！、41年対3年、圧倒的に田中青果が古いですけど、キンコーができてからはどうもはっきりしない。新鮮さ！、田中青果の方は近い市場から買って来るから当然新しいだろう。それから配達は、田中青果はあるんです。しかもそれが多いい。
C：それがどうしたの？(幸一)
T：農薬はどうか？、キンコーはかかっている、田中青果はどうかかわらん。それから時間、田中青果は朝の6時半から夜の8時までです。ね。終わる時刻は同じだけど、朝が違いますね。3時間違う。人数は圧倒的にキンコーが多くて、田中青果が少ない。さあ、どっちが勝っていますか？
C：田中青果！、キンコー！、田中青果！、キン

コー！。

T：どっちですか？

C：（話し合い）

T：はい、今までの理由をまとめて言える人！、
こうだからこうだ！って言える人！、少ない
なあ、4人グループで話し合ってごらん。

C：（話し合い）、

T：はい、よ～し。

C：はい！、はい！

T：はい、希美さん。

C：田中青果は41年間やってきて、近くの大同市
場だから新鮮だし、配達もあるし、農薬は分
からないけど、時間は朝6時半かあら夜8時
までで、人数は少ないけど配達も入っている
から、キンコーと同じくらいだと思う。キン
コーに勝ってる。（希美）

C：それ、まとまってんじゃないよ。順番に言っ
てるだけだよ。（洋子）

T：さてさて、まとめられませんか？。どっちが
勝っていることになるんでしょうね。

C：田中青果！、田中青果！

C：田中青果が負けてんだよ！、先生、答え言っ
てよ！（幸一）

T：答えなんてないよ。自分たちで考えることだ。

C：ある！、ある！（話し合い）

T：まとまった時点で発表していきましょう。は
い、健君たち。

C：キンコーは人数が多いけど、田中青果は配達
があるし、新鮮で安いから勝ってる。（健）

T：新鮮で安い。ああ、「安さ」が出た。安い。

C：はい。

T：弥生さん。

C：田中青果はチラシがなくて、キンコーはチラ
シがあって、田中青果の場合はキンコーと比
べると安いけど・・・田中青果の場合は配達
があるからチラシがなくても配達しているお
店の人が配達を頼む。

T：だから、田中青果が勝ってるって言うわけね。

C：うん・・・はい。（弥生）

C：キンコーは3年間やってて、農薬はかかって
いるけど、人数は多いし、洋服とかも売って
いるから、キンコーの方が売れている。（理恵）

※「社会科実践記録「垂水のまち～地域に学ぶ子

どもたち～」（第3学年）Ⅱ」に続く。

4. 社会科実践記録「垂水のまち～地域に 学ぶ子どもたち～」の成果と課題（1）

「自由勉強」による一人ひとりの子どもの自由
な表現は、自分の表現が学習の内容になっていく
ことを子どもに実感させた。また、社会科の授業
でのグループや学級での共有を通して、表現の共
有が新たな認識につながっていくことを体験し
て、子どもたちは意欲的に「自由勉強」や社会科
の授業に取り組んだ。単元「くらしと商店がいい」
では、学習問題を明確にしなが、小さな青果店
と大きなスーパーマーケットを比べることで、「自
由勉強」に調べ学習が加わり、問題解決的な学習
に主体的に取り組むことができた。

〔注〕

¹⁾ 白尾裕志, 1992, 「垂水の漁業」あゆみ出版『子
どもとつくる産業学習』, pp.85-142

²⁾ 若狭蔵之助, 1984, 『問いかけ学ぶ子どもたち』
あゆみ出版

³⁾ 若狭蔵之助, 1986, 『子どもと学級』東京大学出
版会

⁴⁾ 鈴木正気, 1983, 『学校探検から自動車工業ま
で』あゆみ出版